

# 学習者の母語を活用した音声特化授業の設計

## —中国語母語話者を第一歩として—

劉 羅麟

### 要旨

第二言語教育では教室における母語の使用を回避または禁止する時代もあったが、近年では教育における母語の活用に関する研究が盛んに行われ、その実際の効果も検証されている。本稿では、学習者の母語（母方言を含む）を活用した、音声に特化した授業の設計について報告する。研究の第一歩として中国語母語話者を対象に選び、その母語を活かしながら、日本語のリズム（促音、長音、撥音、拗音）、子音（清音・濁音、ナ行音・ラ行音）、アクセント（初級名詞、人名、複合名詞）、イントネーション（への字のイントネーション、文末のイントネーション）について学習する授業を設計し実践した。

キーワード：母語の活用、音声教育、発音指導、音声シラバス、授業デザイン

### 1. はじめに

第二言語教育では20世紀まで、教室における母語の使用に対して消極的な考え方が主流であった（Cook 2001）。代表的な例としては、母語をなるべく使用せずに目標言語で目標言語を教えるという直接法（Direct Method）が挙げられる。1990年代の頃から母語を教育に積極的に活用する研究が行われるようになり、その効果も実証されてきた。例えば、母語の活用は学習者の言語的・認知的な負担を軽減し（Antón & DiCamilla 1998）、学習の効率を向上させ（Cook 2001）、学習者の不安を軽減できる（Bruen & Kelly 2017）と指摘されている。また、社会における異なる言語話者間の平等（Auerbach 1993）や、学習者の言語アイデンティティーの保持に繋がることも指摘されている（Makulloluwa 2016）。

上記のような教育と研究の動向を踏まえ、筆者は日本語音声教育においても学習者の母語を活用できるのではないかという考えに至った。劉（2022b）の教材調査の結果から、市販の教科書や参考書における日本語の音声とその練習方法に関する説明には、学習者の母語について言及する場合があるとわかる。しかし、学習者の母語を活用した音声教育に関する実践研究が未だ蓄積が少なく、管見の限り、劉（2022a, 2023c）しか見当たらない。同論文では中国語西南官話話者の日本語学習者を対象に、その母語と母方言を活用した発音授業を5週間行っている。そして、アンケートとインタビュー調査から、学習者が得た学びと母語の活用に対する学習者の捉え方を報告している。ただし、母語を活用した学習と練習を経て、学習者の発音と聴取がどう変化するかは解明されていない。

劉（2022a, 2023c）の試みを発展させるべく、筆者は発音課題と聴取課題を組み込んだ形で、学習者の母語を活用しながら日本語の音声について学習する授業を設計し実践した。本稿<sup>1)</sup>では授業の設計について報告し、実践の結果については稿を改めて述べたい。

## 2. 授業の設計

### 2-1. 対象とする学習者の想定

日本語学習者の母語は様々あるが、研究の第一歩としてはまず、学習者数の多い中国語話者を選択した。中国語話者にしたもう一つの理由は、筆者自身も中国語を母語としており、本稿のような萌芽的研究を始めるに相応しいと考えたためである。劉（2022a, 2023c）は中国語の中でも西南官話という方言の話者を対象としたが、研究成果の応用範囲の拡大を目指し、本稿では中国語話者全般を対象とする。学習者の日本語レベルに関しては、発音や聴取上の問題の化石化を避けるために、初期からの音声学習が必要だと考え、初級レベルの日本語学習者にとっても理解しやすい授業構成を心がけた。

### 2-2. 授業の構成

授業はZoomを用いた同期型オンライン授業の形を取った（詳細は劉 2023b を参照されたい）。週1回1時間程度行い、オリエンテーションを除き計10週間実施した。学習内容は表1のとおりである。1～3週目に日本語のリズム、4～5週目に子音、6～7週目にアクセント、8～9週目にイントネーションを扱った。なお、子音に関しては多くの中国語話者が苦手とする清音・濁音およびナ行音・ラ行音にした。授業では目標言語である日本語だけでなく、学習者の母語（母方言を含む）も取り入れている（表1の4列目）。

表1 授業の構成

週	単元	学習する日本語の音声項目	活用する母語の音声項目
0		オリエンテーションと自己紹介	
1	リズム	リズムの基礎、促音	中国語の音節、方言の入声
2		長音、撥音	中国語の「伸ばす音」、鼻韻母
3		拗音、リズムの総合練習	中国語の重母音
4	子音	清音・濁音	中国語の有気音・無気音、 方言の無声音・有声音
5		ナ行音・ラ行音	中国語の声母 N・L
6	アクセント	アクセントの基礎、 初級名詞のアクセント	中国語の声調
7		人名のアクセントの規則、 複合名詞のアクセントの規則	中国語の声調
8	イント	イントネーションの基礎	中国語の語調
9	ネーション	イントネーションと感情	中国語の語調
10		振り返り	

### 2-3. 各週の流れ

各週の流れは図1のとおりである。1章で述べたように、学習者の発音と聴取における実際の変化を把握するために、発音課題と聴取課題を授業に組み込んでいる。学習者が各週の授業を受ける前には、指定の語や文を録音し、事前の発音課題（①）として提出す

劉羅麟／学習者の母語を活用した音声特化授業の設計

る。授業は聴取課題 (②), その週の音声項目の学習と練習 (③), おさらいと振り返りシートの記入 (④) という順で行う。聴取課題に関しては, 先週の事後課題と今週の事前課題の二つがある。語や文の録音を聞きながら, 聞こえたものをオンラインのアンケートに回答する。学習者が授業を受けた後には, 各自復習し練習したうえで, 指定の語や文を録音し, 事後の発音課題 (⑤) として提出する。事前と事後の発音課題をティーチングアシスタントと教師が評価し, 学習者に個別と全体のフィードバック (⑥) を教師が行う。その後, 学習者は次週の授業の準備として, 事前の発音課題を提出する (①に戻る)。

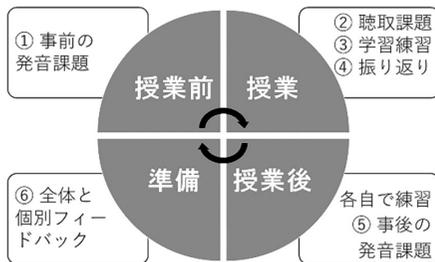


図1 各週の流れ

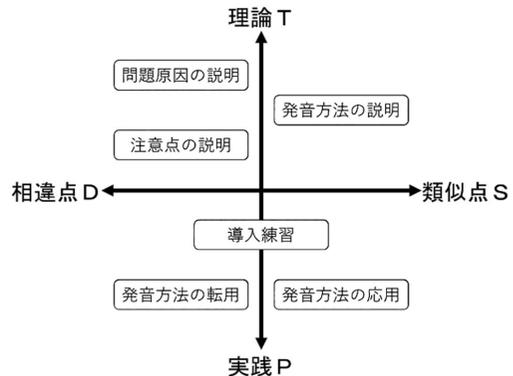


図2 母語の活用方法の枠組み TP-SD (劉 2023a より)

### 3. 授業における母語の活用

授業で日本語の音声について学習し練習する際には, 学習者の母語を活用しながら, 必要に応じて視覚の補助 (例: ˊのような折れ線型, ↓のような矢印型, ①のような丸付き数字型のアクセント記号) や身体の補助 (例: 手や頭などの体の動き) も適宜取り入れる。本章では, 授業における母語の具体的な活用方法について述べる。これらの方法は, 劉 (2023a) で提案される「言語間類似点・相違点に基づく理論的・実践的母語の活用方法の枠組み (TP-SD)」(図2) に基づいて考案したものである。なお, 方言と特筆しない限り, 以降で言う「中国語」は公用語の「普通話 (Mandarin)」を指す。

#### 3-1. 1～3 週目：リズムの単元

##### 3-1-1. 1 週目：リズムの基礎, 促音

リズムの基礎に関しては, 日本語と中国語の外来語 (例: 「オリンピック」と「奥林匹克」) を発音しながら, 両言語の相違について学習者に考えてもらう (【導入練習】)。この活動を通してリズムの違いに対する意識化を促す。このように, 同じ外来語でも異なる音訳になることを例に, 母音・子音の構成の側面からモーラと音節の違いについて説明し, 日本語において「拍」の概念が重要だと強調する (【注意点の説明】)。

促音に関しては, 日本語と中国語を比較し, 日本語では促音の有無 (例: 「さか」と

「さっか」で意味が変わると説明する（【注意点の説明】）。促音の重要性に対する意識化が促されるが、その発音が難しいと感じる学習者もいる。そこで、呉語、粵語、閩語などの中国語の方言では、入声（にっしょう）を含む語の発音（例：閩南語の「国家」[kok.ka]）が促音に類似していることを提示し、その要領で促音の発音を練習する（【発音方法の応用】）。ただし、サ行の前の促音は摩擦音を持続させると注意する。

### 3-1-2. 2週目：長音，撥音

長音に関しては、日本語と中国語の比較を通して、中国語では音を伸ばす（例：「輸送」[ʃusɔŋ]と「輸～送」[ʃu:sɔŋ]）ことで強調を表せるが意味は変化せず、日本語では長音の有無（例：「ゆそう」と「ゆうそう」）で意味が変わると説明する（【注意点の説明】）。多くの日本語学習者にとっては、長音を発音できるかというよりも、母語にない日本語の短音・長音の音韻対立を十分に意識できるかという問題が肝要である。そこで、母語を敢えて日本語のリズムに変えて発音するという方法で練習する（【発音方法の転用】）。例えば、中国語話者には中国語の地名を使うのが効果的である（例：中国語の「成都」[tʂʰɛŋtu]を日本語の「せいと」のように「成～都」[tʂʰɛŋ.tu]と伸ばす）。馴染みのある母語を馴染みのない発音に変えることにより、母語の言語習慣にない発音方法に意識が向く。リズム感覚を掴んでから日本語の地名を練習すれば、短音・長音の違いを意識して発音できるようになる。

撥音に関しては、日本語と中国語を比較し、中国語では鼻韻母の有無（例：「中西」と「中心」）で意味が変わると同様に、日本語でも「ん」の有無（例：「ちゅうし」と「ちゅうしん」）で意味が変わると説明する（【発音方法の説明】）。ただし、中国語では鼻韻母の有無で音節の長さが変わらないのに対し、日本語では撥音を付けると1拍増えるため長く発音する必要があると強調する（【注意点の説明】）。その後は上記の長音と同様に、母語の中国語を敢えて日本語のリズムに変えて発音するという方法で練習する（例：中国語の「北京」を日本語の「ぺきん」のように「北京～」と伸ばす）。

### 3-1-3. 3週目：拗音，リズムの総合練習

拗音に関しては、中国語のピンインの考え方から出発し、分けて2音節で発音するのと合わせて1音節で発音するのと（例：「西安」[xi.an]と「仙」[xian]）では意味が変わることを学習者に想起してもらう。続けて、日本語の拗音（例：「ひやく」と「ひやく」）もこれと類似していると説明する（【発音方法の説明】）。ただし、日本語の拗音には中国語にない音があり、一概に母語の音で代用しようとすると発音上の問題<sup>2)</sup>が生じやすいと注意を喚起する（【注意点の説明】）。

リズムの総合練習に関しては、3-1-1～3-1-3で述べた学習内容を復習したうえで、日本語と中国語の外来語を用いた練習<sup>3)</sup>を行う。例えば、日本語の「オリンピック」と中国語の「オリンピック」を比較すると、中国語は漢字4つで4音節だが、日本語は「リン」が2拍のうえで「ピック」に促音が入る。このリズムの違いを意識しながら発音を練習する。

### 3-2. 4～5 週目：子音の単元

#### 3-2-1. 4 週目：清音・濁音

清音・濁音に関しては、例として日本語の「た」と中国語の「他」を、そして「だ」と「搭」を比較し、それぞれ同じ音かどうかについて考えてもらう。ローマ字とピンインの表記では同じように見えるが、日本語は無声音・有声音の音韻対立であり、中国語は有気音・無気音の音韻対立である。両者が同じだと誤解し、母語の基準で日本語の音を弁別しようとする、清音・濁音の混同に繋がる」と説明する（【問題原因の説明】）。

ところが、日本語の無声音・有声音の区別が声帯振動にあると説明するだけでは、多くの学習者が理解しづらいと感じる。そのため、学習者に自身の母方言について内省してもらい、方言の音を発音しながら声帯振動を把握するという方法を取る（【導入練習】）。方言の音としては、閩語の「肉包」[bah.pau]、呉語の「帶」[ta]と「大」[da]、西南官話の「神」[sen]と「人」[zen]などが使える。方言に無声音・有声音の対立がない学習者は、普通話の「瘦肉」[şou.zou]が使える。声帯を振動させない／させる方法を把握できたら、それを日本語の清音・濁音の練習に応用する（【発音方法の応用】）。ただし、ここで挙げた歯茎摩擦音 [s]・[z] やそり舌摩擦音 [ş]・[z] は、声帯振動の有無で区別するという点において日本語の清音・濁音と共通するが、音自体は異なる。母語（母方言）の発音方法を最初、うまく日本語に応用できないと感じる学習者もある（劉 2023c）。この場合、母語の音をそのまま日本語に用いるのではなく、母語の音を通して声帯振動を理解してから、その発音方法を日本語に応用することに留意する必要がある。その際、教師による個別サポートが重要となる。

#### 3-2-2. 5 週目：ナ行音・ラ行音

ナ行音・ラ行音に関しては、普通話にある /n/ と /l/ の区別（例：「南」と「藍」）が自身の母方言にもあるか、学習者に各自発音しながら確認してもらう。その区別がない場合、母方言の影響で日本語のナ行音・ラ行音を混同することがあると説明する（【問題原因の説明】）。続けて、普通話の /n/ と /l/ の語を用いた練習を通して、息を鼻から通す／口から通すという発音方法を把握する（【導入練習】）。/n/ と /l/ の区別がないように見える方言でも、母音 /i/ の前では区別することがあるので、普通話の /n/ と /l/ の代わりに自身の方言の /ni/ と /li/ を使うこともできる。さらに、練習の補助として、鼻を手でつまみながら発音し、非鼻音の /l/ は問題なく発音できるが、鼻音の /n/ は発音しづらいことを確認する。このように、鼻音と非鼻音の発音方法を把握できたら、それを日本語のナ行音（鼻音）・ラ行音（非鼻音）の練習に応用する（【発音方法の応用】）。

一方で、母方言に /n/ と /l/ の区別があり、日本語のナ行音・ラ行音を混同しない学習者の場合は、その学習ニーズに応じて一歩進んだ練習を行うことも可能である。日本語のラ行音は異音として側面接近音の [l] もあるが、多くの場合では、はじき音の [ɾ] が用いられている。そこで、中国語の [l] は舌を歯茎に付けて発音するが、日本語の [ɾ] は舌で歯茎を弾いて発音すると説明する（【注意点の説明】）。

### 3-3. 6～7週目：アクセントの単元

#### 3-3-1. 6週目：アクセントの基礎，初級名詞のアクセント

アクセントの基礎に関しては、日本語のアクセントが中国語で「音調」や「声調」に訳されることが多いため、中国語の声調とは同じ概念だと誤解されやすい。そこで、例えば日本語の「マ」と中国語の「ma」を単体で発音し、アクセントと声調の変化が生じるか学習者に考えてもらう。そのうえで、中国語の声調は音節内の高低変化であるのに対し、日本語のアクセントはモーラ間の高低変化だと説明し、中国語の四声をそのまま日本語（東京方言）の4つのアクセント型（平板、頭高、中高、尾高）に当てはめないよう注意を喚起する<sup>4)</sup>（【注意点の説明】）。例えば、日本語の平板型は実は1拍目と2拍目の高さが異なり、平らな中国語の一声とは異なる。また、一つの語で一度下がったアクセントは二度と上がらないという点は、下がってから上がるという中国語の三声と異なる。

初級名詞のアクセントに関しては、上記で習った内容を踏まえ、アクセント型別に発音の練習を行う。その際、中国語由来の単語を敢えて練習材料にし、中国語の声調に影響されないよう強調する（【注意点の説明】）。例えば、「ラ↓ーメン」を中国語の「拉麵（lā miàn）」のように「ラーメ↓ン」と発音しないことや、「しんごう」を中国語の「信号（xìn hào）」のように「し↓んごう」と発音しないことなどである<sup>5)</sup>。

#### 3-3-2. 7週目：人名のアクセントの規則，複合名詞のアクセントの規則

人名のアクセントの規則に関しては、日本語について説明する前に、自身やクラスメートの中国語の名前を発音し、その声調に規則があるか学習者に考えてもらう（【導入練習】）。続けて、日本語の人名を例示し、発音しながらその規則について考えてもらう。両言語の比較を通して、母語の中国語では人名の声調に規則がないが、日本語の人名はアクセントの下がらない「0型」（例：「わたなべ」）と、後ろから3拍目で下がる「-3型」（例：たか↓はし）に大別されると説明する。中国語の人名に関する導入を省くことは無論可能だが、自身の名前の声調について考え、語り合う時間を設けることにより、日本語との対比が生まれ、学習者の興味を引き立てることも可能となる。これは、学習の促進以外の、情意面における母語の活用効果である（劉 2023a：205-206）。

複合名詞のアクセントの規則に関しては、日本語と中国語を比較し、中国語では二つの名詞が複合名詞に融合しても声調の変化が基本ないが、日本語では複合名詞にアクセントの変化が伴う場合が多いと説明する（【注意点の説明】）。説明する際は、日中両言語に漢字表記という共通点があるため、「北京大学」などの漢字語彙が使いやすい<sup>6)</sup>。中国語では声調の変化がないのに対し、日本語では「ぺ↓きん+だ↑いがく=ぺ↑きんだ↓いがく」のようにアクセントが変化することが対照的で、学習者にとって理解しやすい。

### 3-4. 8～9週目：イントネーションの単元

#### 3-4-1. 8週目：イントネーションの基礎

イントネーションの基礎に関しては、アクセントの単元で学習した内容を踏まえ、日本語と中国語における文レベルのピッチ（声の高さ）の変化を比較する。例えば、日本語では「私は中国の四川省から来た留学生です（わ↑たしは ちゅ↓うごくの し↑せ↓んしょ

うから き↓た りゅうが↓くせいです)」のように、アクセントの存在により語レベルでの上がり下がりがあるが、文レベルではピッチが下降していく。それに対して、中国語では「我是来自中国四川省的留学生 (wǒ shì lái zì zhōng guó sì chuān shěng de liú xué shēng)」のように、漢字ごとに声調が付与されている。一文字目の「我」を例に言えば、その声調記号(ピンイン:wǒ, IPA:[uo411])に示されるように、一音節の中でピッチが下がってから上がる。このように、いずれの言語でも文末にかけてピッチが徐々に下降していくが、声調(四声)の影響により、中国語は日本語よりもピッチの起伏が目立つと言える。そのため、授業では母語に影響され、日本語の文のイントネーションを不必要に起伏させないよう注意を喚起する(【注意点の説明】)。このような説明を行った後は、ほかの補助手段を用いて日本語のイントネーションを練習する。例えば、頭をイントネーションの下降に合わせて下げる方法や、スズキクン<sup>7)</sup>を使ってイントネーションを表す線を引く方法などである。

### 3-4-2. 9週目：イントネーションと感情

イントネーションと感情に関しては、日本語について説明する前に、中国語における文の意味と発音との関係について学習者に考えてもらう(【導入練習】)。例えば、何を食べたかという質問に答える際の「拉麵」と、提案する際の「拉麵」と、相手の提案に躊躇する際の「拉麵」とでは発音が異なることを自覚してもらい、語調(イントネーション)という概念を導入する。続いて、日本語で同じ意味を表そうとする際に、例えば「ラーメン」を、どのようなイントネーションで発音するかについて考えてもらう。

初級レベルや音声について学習した経験がない学習者の場合は、彼らにとってわかりやすいように、上昇調と下降調のみに着目する。特に疑問や提案を表す上昇調について、中国語では文全体が上昇するのに対し、日本語では文末の上昇が目立つ(ただし、アクセントは変化しない)と説明する(【注意点の説明】)。その後は文末のイントネーションに重点を置き、平易な動詞文、名詞文、「～ですか」、「～ですよ」を例に、上昇調と下降調を練習することが可能である。

## 4. おわりに

本稿では学習者の母語(母方言を含む)を活用した、音声に特化した授業の設計について報告した。授業を実施した結果(学習者の反応、発音や聴取の変化など)については稿を改めて述べたい。また、研究の第一歩として中国語話者を選択したが、今後は英語や韓国語など他言語話者を対象に研究と実践を続け、研究成果を教育現場に還元したい。

### 注

- 1) 本稿は、早稲田大学特定課題研究助成費(2022E-035)による研究成果の一部である。
- 2) 例えば、母語である中国語の母音に影響され、拗音「ゆ」と「よ」の発音が曖昧になり、両者の混同が起こる場合がある。
- 3) この方法の考案においては、戸田(2004:21-22)を参考にした。
- 4) 中国語話者の日本語学習者の場合、学習初期に日本語のアクセントを①②③調のように

習うことが多い。筆者の教育経験から述べると、日本語の⑩調（平板型）が中国語の一声と同じ、日本語の①調（頭高型）が中国語の四声と同じだと誤解している学習者がいる。

- 5) 本稿では視覚的なわかりやすさを考慮し、↓で下がる箇所を示し、↑で上がる箇所を示す。
- 6) この方法の考案においては、戸田（2004：100-101）を参考にした。
- 7) <https://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/phrasing>

## 参考文献

- 戸田貴子（2004）『コミュニケーションのための日本語発音レッスン』スリーエーネットワーク
- 劉羅麟（2022a）「日本語の音声の授業における学習者の母語の活用—学習者が得た知識面・認識面・運用面の学び—」『日本語／日本語教育研究』13, 169-184.
- 劉羅麟（2022b）「日本語教材におけるナ行音・ラ行音の記述に関する一考察—学習者用教科書と教師用参考書の調査と分析を通して—」『中国語話者のための日本語教育研究』13, 78-93.
- 劉羅麟（2023a）『日本語の音声の習得と教育における母語の役割—学習者の母語と母方言を活用した音声教育を目指して—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文
- 劉羅麟（2023b）「同期型オンラインで行われた学習者の母語を活用した日本語発音授業に関する実践報告」『CASTEL/J-2023 予稿集』, 169-173.
- 劉羅麟（2023c）「日本語の清音と濁音の指導における中国語方言の活用—受講者の捉え方から見る効果と課題—」『中国語話者のための日本語教育研究』14, 49-65.
- Antón, M. & DiCamilla, F. J. (1998) Socio-Cognitive Functions of L1 Collaborative Interaction in the L2 Classroom. *The Canadian Modern Language Review*, 54(3), 314-342.
- Auerbach, E. R. (1993) Reexamining English Only in the ESL Classroom. *TESOL Quarterly*, 27(1), 9-32.
- Makulloluwa, E. (2016) Benefits of Mother Tongue in the Adult ESL Classroom. *Literacy Information and Computer Education Journal*, 7(3), 2392-2397.
- Bruen, J. & Kelly, N. (2017) Using a Shared L1 to Reduce Cognitive Overload and Anxiety Levels in the L2 Classroom. *The Language Learning Journal*, 45(3), 368-381.
- Cook, V. (2001) Using the First Language in the Classroom. *The Canadian Modern Language Review*, 57(3), 402-423.

（りゅう ろうりん，東京大学大学院工学系研究科）